

三重大学 海女研究センター だより



vol.8

三重大学海女研究センター
(三重大学人文学部総務担当)
☎059-231-6991

三重大学水産実験所について

三重大学生物資源学部には、津の上浜キャンパスとは異なる附属教育研究施設として、農場、演習林、水産実験所および練習船（勢水丸）の4つの施設があります。水産実験所は水産業に関係する教育研究活動を行うために1974年に開設され、これまでは英虞湾内の座賀島にありましたが、2021年4月に鳥羽市小浜町に移転し、現在は鳥羽市を主な舞台として活動を行っています。

水産実験所には海洋生物の飼育研究を行う飼育室や分析機器を備えた実験室、旧小浜小学校校舎を改装した宿泊施設があり、海洋環境や海洋生物などに関する学生の実習や研究に利用されています。

す。また、水産実験所には3人の教員が配置されており、今回は山本が誌面をお借りして、伊勢志摩地域での活動について紹介させていただきます。
地域教育としての海洋教育
伊勢志摩国立公園にも含まれる鳥羽市は、自然と人との共生が息づく世界に誇れるべき日本の姿を有していますが、一方で、人口減少・少子高齢化による産業や文化の衰退が見られます。総人口は年間9%程度の減少傾向が続いており、中でも年少人口は年間18%程度の大きな減少が続きます。子どもが地域から減っていくということ、地域外へ流出した後に戻ってこないということ、まさに喫緊の課題と言えます。これら地域課題の解決方法のひとつが、海洋教育であると考えています。

令和4年度からは、鳥羽市のすべての小学校が、学校運営協議会を有するコミュニティ・スクールとなつていきます。地域の子どもたちが地域のことを知り、地域のかたがたや同年代の仲間たちと地域の中で自然や文化と触れ合う機会を持つことが、将来にわたって地域と関わっていくきっかけになるのではないかと、多くの人が考えて行動しています。



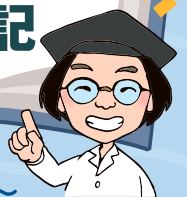
水産実験所での実習の様子



菅島でのシーカヤック体験の様子

(山本康介)

鳥羽・海藻文化革命 岩尾博士の 海藻博物記



vol.27

～クロモの話～

水産研究所 ☎(25)3316

今回はクロモ。モズクの仲間の海藻である。ある生物種について論文を通じて新種記載する時、その特徴なども記載する。その時のよりどころになる標本をタイプ標本と呼び、そのタイプ標本を採取した場所をタイプ産地と呼ぶ。クロモのタイプ産地はなんと、鳥羽市の菅島なのである。だが、僕が鳥羽で働き始めてから12年、何度も菅島の海に潜っているが、一度もその姿を見たことはない。相違や群蛸ではいくらか生えている姿を見ているのだが、さて、このクロモだが、もちろん食べることができる。そしてとてもおいしい海藻として有名で、鳥取県などでは「坊主ころし」と呼ばれている。法事で食事をよばれた際にクロモを出され

た和尚さんが、あまりのおいしさに食べすぎて亡くなってしまったからとも、体に良いこの海藻をみんなが食べることでお坊さんの仕事が減ってしまうからだとも言われている。実際に鳥取県の米子市や境港市を訪れた際、地元のスーパードレーに盛られてたくさん売られていた。しかし、すぐお隣の鳥根県松江市では生えているのに水揚げもせず、食べもしないらしい。三重県でも鳥羽市では食べないが、紀北町などではよく採って食べる人気の海藻の一つであるという。

この海藻、春ごろ繁茂するのだが、干潮で潮が引いた時にちようど姿を現さない程度の深さに生えているため、他においしい海藻がある鳥羽では食べる習慣が根付かなかつたのではないだろうか。しかし、このまま食べないでいるのはもったいないので、なんとか胞子などを採取し、増殖技術を確立したいと思っているのだが、いまだほとんど手を出せずにいる。



モズクよりもしっかりしたからだをしており、長さは20cm程度。



水深2mくらいの潮通りの良い穏やかな入り江の石の上などに生えている。